

修士論文（要旨）  
2021年1月

日本語学習リソースとしての情報バラエティー番組の使用状況と可能性

指導 齋藤伸子 教授

言語教育研究科  
日本語教育専攻  
219J3008  
徐 光道

Master's Thesis(Abstract)  
January 2021

Information and Variety Program Usage and Potential as a Japanese Language Learning  
Resource

Guangdao Xu  
219j3008  
Master's Program in Japanese Language Education  
Graduate School of Language Education  
J. F. Oberlin University  
Thesis Supervisor: Nobuko Saito

## 目次

第1章 研究背景と目的及び調査方法	1
1.1 本研究の背景	1
1.1.1 インターネットの発達と学習ニーズの多様化	1
1.1.2 大学時代の筆者の周りの状況	1
1.1.3 今期待されている日本語学習とは	2
1.2 本研究の目的	3
1.3 本研究における調査方法	4
第2章 日本語教育における映像教材の効果に関する先行研究	5
第3章 「情報バラエティー番組」と「日本語学習リソース」の定義	7
3.1 「情報バラエティー番組」の定義	7
3.2 「日本語学習リソース」の定義	8
3.3 日本語学習リソースの立場の情報バラエティー番組	8
第4章 学習リソースとしての情報バラエティー番組の使用状況	10
4.1 調査対象者と手順	10
4.2 アンケート内容と設問	10
4.3 アンケート結果から見えるもの	11
4.3.1 調査協力者の情報	11
4.3.2 調査協力者の日本語能力	12
4.3.3 情報バラエティー番組の視聴状況	12
4.3.4 自由記述から浮かび上がるもの	15
第5章 学習リソースとしての情報バラエティー番組の可能性	16
5.1 調査概要と分析方法	16
5.2 来日前の情報バラエティー番組の使用と感じた可能性	17
5.2.1 日本の大衆文化やマスメディアによる影響	17
5.2.2 情報バラエティー番組の使用法と学習ストラテジー	18
5.2.3 面白さによる内発的動機づけ	19
5.2.4 教科書の補助的な役割	20
5.2.5 今の日本の情報の提供	21
5.3 来日に伴う生活環境の変化による可能性の消失	23
5.3.1 来日後の学習ストラテジーの変化	23
5.3.2 来日年数と視聴頻度の減少	24

5.3.3 来日に伴う生活環境の変化による可能性の消失.....	24
第6章 考察.....	26
第7章 本論文のまとめと今後の課題.....	28
参考文献	
資料 アンケート調査記入シート	

2000年代以降のIT技術の急速な発展により、多くの人がインターネットを通じ、日本のことを知るようになった。工藤（2006）からは、インターネットに載せている日本の大衆文化（例えばアニメ、ドラマ、テレビ番組など）を学習リソースとして日本語を学習する人が多く存在することが分かった。一方、日本語教師を対象とした保坂他（2004）の映像教材に関する調査ではアニメ、映画、ドラマなどのような非教育用の映像教材を使っても、その効果があまり感じられないことが浮かび上がっていた。そこで本研究は学習者の立場から学習リソースとしての情報バラエティー番組の使用状況と可能性を明らかにするため、以下の4つのリサーチクエスチョンを設定した。

1. 日本語学習者は情報バラエティー番組を視聴しているのか、視聴状況の全体像はどうか。
2. 情報バラエティー番組は学習リソースとして、日本語学習のどのような面に役立つのか。
3. 情報バラエティー番組は教科書の補助的な役割を果たしているのか。
4. 情報バラエティー番組が自分の日本語学習に役立ったと感じる学習者はどのような学習法を使っているのか。

本研究はまず38名の日本語学習者を対象に情報バラエティー番組の使用状況に関するアンケート調査を実施する。その結果から情報バラエティー番組の視聴状況、使用者の感想、日本語学習への影響などを考察する。次にアンケート調査で情報バラエティー番組が自分の日本語学習に大きく役立ったと回答した2名の協力者に半構造化インタビューをし、彼らがどのような学習ストラテジーを使っているか、情報バラエティー番組を学習リソースとしてどのように考えているかなどを聞く。インタビュー内容は全部録音して文字化し、分析を行う。

アンケート調査とインタビュー調査の結果の分析からリサーチクエスチョン1の「日本語学習者は情報バラエティー番組を視聴しているのか、視聴状況の全体像はどうか」については、大半の学習者（25名）が情報バラエティー番組を視聴したことがあり、半数近くの学習者はインターネットを通じて情報バラエティー番組を視聴している。学習者の一ヶ月の平均視聴回数は7.6回、一ヶ月の平均視聴時間数は21.7時間である。その中、来日年数と共に情報バラエティー番組の視聴頻度が減少する傾向が見られている。原因は「生活環境の変化」、「来日前と比べれば日本の情報が身近になった」、「日本語学習への関心が減った」と考えられる。

リサーチクエスチョン2の「情報バラエティー番組は学習リソースとして、日本語学習のどのような面に役立つのか」については、アンケート調査から情報バラエティー番組視聴歴のある学習者は全員自身の日本語学習に役立ったと回答した。役立ったところは「会話面」・「情報面」・「語彙面」などが挙げられる。

リサーチクエスチョン3の「情報バラエティー番組は教科書の補助的な役割を果たしているか」については、インタビュー調査対象S1は日本語教科書をほとんど使用せず、情報バラエティー番組を「主教材」に使って日本語を学習してきたのに対し、S2は最初日本語教科書を主教材に使っているが、次第に情報バラエティー番組を「主教材」替わりに使うようになった。結果としてS1の会話はうまくできるものの、文章を書く時の文法ミスが多い。S2はそのような現

象が見られていない。従って、情報バラエティー番組は使い方によって教科書の補助的な役割を果たしていると考えられる。

リサーチクエスチョン4の「情報バラエティー番組が自分の日本語学習に役立ったと感じる学習者はどのような学習法を使っているのか」については、「情報バラエティー番組に出た知らない単語を調べて、ノートに書き留め、記憶する」、「情報バラエティー番組の出演者の発話を真似する」、「情報バラエティー番組の内容を文字化する」という学習ストラテジーが使われている。

リサーチクエスチョンの答えを探すために質的研究を使用したため、一部の結果は広く一般化することができない。とくに学習ストラテジーに関する部分はインタビューだけで得られた結果なので、ほかの学習者はこの学習ストラテジーに合っているかどうか、これから検討していく必要がある。

## 参考文献

- 伊田勝憲・乾真希子 (2011) 「学習意欲研究における自律性の位置づけ：内発的動機づけの批判的検討を通して」『釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要』第 43 号, pp. 7-14.
- 伊藤創 (2018) 「日本語教育における『期待される学習者像』：〈『多様なものの見方』を提供するリソース〉としての外国人日本語学習者とテキスト」『社会言語学』(18), pp. 85-96.
- 英保すずな・内藤裕子・渡嘉敷恭子 (2014) 「国内外の日本語教育機関における初級日本語教材の実態調査・ニーズ調査と分析結果」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』24 巻, pp. 37-48.
- 岡部真理子・下平菜穂・富谷玲子 (2002) 「リソースからとらえた学習の多様性」『2002 年日本語教育学会秋季大会予稿集』, pp. 233-238.
- 川添良幸・才田いずみ (1994) 「マルチメディアと日本語教育」『人文科学とコンピューター』, pp. 23-8.
- 菊池富美子 (2005) 「学習リソースとは何か—日本語教育における学習リソース研究の概観—」『言語文化と日本語教育』第 30 巻, pp. 107-110.
- 工藤節子 (2006) 「台湾の日本語学習者の学習リソース利用—インタビュー調査から—」『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究海外調査報告書』, 国立国語研究所.
- 窪田守弘 (2002) 「映画による日本語教育の実際と可能性」『総合的日本語教育を求めて』, 国書刊行会.
- 窪田守弘 (2006) 「日本映画の再評価と教材化について—日本語教育の視点からみたシナリオやマンガ—」『平成 18 年日本語教育学会春季大会予稿集』.
- 古閑忠通 (2013) 「情報・バラエティー番組の演出要素定量分析の試み—プライムタイム番組の分析調査から—」『放送研究と調査』2013 年 5 月号, pp. 68-81.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社.
- 鈴木理子 (2007) 「大衆文化をリソースとした日本語学習—個別対応型授業で行う意義—」『桜美林言語教育論叢』, pp. 33-49.
- 田中望・斉藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際』, 大修館書店.
- トムソン木下千尋 (1997) 「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』7, pp. 17-29.
- 友宗由美子・原由美子・重森万紀 (2001) 「日常感覚に寄り添うバラエティー番組—番組内容分析による—考察」『放送研究と調査』2001 年 3 月号, pp. 12-41.
- 西隈俊哉 (2006) 「日本語教育のための映画・アニメの理解と利用—アニメと学習者と教師—」『平成 18 年日本語教育学会春季大会予稿集』.
- 原由美子・七沢潔 (2018) 「教科書にない「日本」に出会った—番組 e テキスト・北米 4 大学での実験授業—」『放送研究と調査』, pp. 42-70.
- 保阪敏子・土井真美・長谷川恒雄 (2004) 「海外における映像教材に対するニーズの共通性と相違性—『日本語教育用 NHK テレビ番組集』制作のためのニーズ調査から—」『平成 16 年日本語教育学会国際研究大会予稿集』.
- 星野命 (1980) 『概説・カルチャーショック』現代のエスプリ, pp. 5-30.
- 本田由紀 (2005) 『多元化する「能力」と日本社会ハイパー・メリトクラシーのなかで』, NTT 出版株式会社.

宮崎里司 (2009) 「自律学習支援のためのタスクと学習ストラテジー」、『タスクで伸ばす学習力学習ストラテジーを活かした学びの設計』 pp. 12-27, 凡人社.

李詠茵・梁嘉欣 (2016) 「バラエティ番組を用いた日本語授業の振り返り—香港の初級後半・中級の社会人学習者を対象にした実践から」 『日本学刊』 第 19 号, pp. 136-150.

#### 参考 HP

「我が国の高等教育の将来像（答申）」 文部科学省  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm) (2020 年 11 月 29 日閲覧)

「21 世紀型スキル」 文部科学省  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1296728.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1296728.htm) (2020 年 12 月 23 日閲覧)